



体育心理学研究会会報

巻 頭

「体力づくり」と体育心理学

松 井 三 雄

教育のどの分野においても、常に問題としなければならないのは、生命体としての人間であることは、いうまでもない。すなわち、知能とか、健康とか、体力とかいっても、それは、生きた人間というものの基礎の上に立つて、はじめて現実的な意味や価値をもつものである。

最近声を大にして叫ばれるようになってくる「体力づくり」運動は、ややもすると肉体的能力の向上だけをとりあげている観がないでもない。これでは、人間不在の体力づくりとか、競争馬の調教と何らえらぶところがなにかと評されてもいたし方がないであろう。真の体力づくりは、生きた人間の土台の上に立ち、生活の上に働らく体力を目標にしなければならない。ただ肉体的能力としての体力は、決して教育の最終目標にはなりえないからである。

文部省の教育白書「青少年の健康と体力」

は、青少年の体格は明らかに改善されたが、走、跳、投などの運動能力がこれにともなうて発達していないという事実を指摘し、これを問題にしている。この結論に対しても異論はあろうが、かりに体格に相応するこれらの運動能力の発達がみられたとしても、全一体としての人間からすれば、それは、まだその一面にすぎない。広い視野からみれば、現在の青少年には、それ以上の重大なアンバランスがある。すなわち、肉体的側面の発達と精神的側面の発達との不調和がこれである。ここに問題行動発生の一因も潜んでいるのではあるまいか。

この際、肉体次元での体力づくりをすて、全一体としての人間の上に立つた体力づくりにたちのほり、心身の調和のとれた青少年の発達を促進することが急務である。そして体力づくりを、このような正しい道に引きもどすことこそ、体育心理学に課せられた、目下の重要課題の一つではなからうか。

日本体育学会

第18回大会における
体育心理学専門分科会
シンポジウムによせて

日本大学 藤田 厚

日本体育学会第18回大会における体育心理学専門分科会シンポジウムのテーマとして、「運動学習に関する諸問題(技術習得過程におけるイメージの役割)」が取り上げられたが、体育心理学専門分科会でシンポジウムのテーマとして運動学習の問題を取り上げるのは、北大における第16回大会、東大における第17回大会に引続いて今回が第18回目である。

今回のシンポジウムにおいては、京都学芸大学の末利氏を司会者として、大阪体育大学の鷹野氏、名古屋大学の勝部氏、順天堂大学の加賀氏の三氏が実験室における結果を基にして、また、青山学院大学の高村氏がスキー指導における実際的な立場から、それぞれ運動学習においてイメージを用いることの効果を発表し、討議が行われた。

最初にイメージとは何かという概念規定の問題について司会者と演者間に意見の不一致がありその問題について討議がなされたが、この問題はもつと徹底的に討議されるべきだったと思う。何故ならばイメージに関する概念規定をはつきりして、それを司会者と演者間、そしてフローアの会員連の間に徹底させておくことがこのシンポジウムの出発点に当ることであつたにもかかわらず、それが不十分であつたため、後に続くフローアからの質問や討議の内容がぼやけた感じがしたか

らである。

ともあれ、前2回の運動学習に関するシンポジウムの内容から考えると、第1回目における学習の概念規定に関する意見の不一致から出発して、第2回目における運動学習のとらえ方の問題、そして今回の技術習得過程におけるイメージの役割というように、運動学習の取り上げ方が内部過程に関してなされるようになり、イメージを第1信号系、第2信号系のいずれに位置づけるべきかというような討議がなされたということは運動学習に関する研究の方向を示すものとして甚だ興味深く感じられたのである。

さて、今回のシンポジウムにおける四氏の発表はいずれも運動学習においてはイメージが重要な役割を果たすものであり、そのイメージを学習に際して利用することが効果を高めるものであること強調してはいたが、イメージの利用の仕方に関して具体的に触れるところが少かつた。鈴木氏の発言にもあつたように、これからの運動学習におけるイメージの役割に関する研究では、どのようにイメージを利用すれば効果を高めることができるかという実際的な研究が必要であり、そうでなければ、学習の内部過程としてイメージを取り上げることの意義も少なくなつてしまつたろう。例えば、高村氏がスキーの実際的指導においては、学習者の技術習熟の程度や精神発達程度に応じてイメージを与えてゆくべきだと発言していたが、実際の指導の立場で主観的に判断して適宜なイメージ指導をなし得るためにも、学習者の運動のイメージがどの程度形成されているか、その質的内容はどうなつているかを客観的に知り、また、イメ

ージの形成を促進し、その質的内容を改変してゆくためにはどうすればよいかなどの実践的見地からの研究成果に期待したいと思うのである。運動の習熟形成過程はその運動のイメージが一般的な漠然としたものから視覚的イメージに変化し、さらにそれが筋感的イメージに変る過程であると考えられるが、これからの研究ではイメージの質的变化の過程をとらえ、その足りない部分を補うよりにはどのような方法が最も効果的かということの解明する必要もあると思つるのである。G・S・Rを利用してイメージの形成過程を把握する勝部氏の方法は秀れたものであるが、矢張り上述の質的变化を伝えることは困難を感じざるを得ないと思われる。その意味ではソ連で学習者にその持つている運動のイメージを詳細に記述させ、それを空間的、力的特徴に分析し、その足りない部分を補うための指導している事実などは大いに参考になると思ふ。

運動学習の内部過程の研究に関する者として私はこの方向に向つて研究の発展を心から期待している者の1人である。

プリントについての感想

大阪体育大学 属野健次
私は今度の学会では第四会場係であつたから、殆んど全日程をこの会場に詰めていた。それ故、心理部門の発表に関する感想を述べるにはりつてつけの役柄であつた筈なのに、さあとなると纏つた考えが浮んで来ない。勿論、役務上の責任で、会場を出たり入つたりして、発表拝聴が中断されたり、気持の方も

とかく聴くこと以外にそれるありさまだつたこともあります。しかし、毎年の感想ですが、8分の発表、2分の質問で、大体その研究の要点がつかめる例が極めて少ない。そこで感想といへばとかく内容よりも一般的雰囲気とか、態度に関する印象の方が先に来ってしまう。けれども、これは感心したことではないから、何としても発表内容に向けられた興味を中心になつて懐顧されるような学会でなければならぬと思ふ。そこで、いま手許に残されたプリント(実は全発表のプリントを会場係用として残しておいたのですが、何かの手違いで紛失してしまい、たまたま残つたものしかなく、申しわけないのですが)を読んで勉強しました。読んでめくとそれぞれ面白いところを発見し、これなら会場で質問すればよかつたなどと残念に思ふ。そこで思ひのだが、会場での発表を補うことを初めから予想して、プリントの作成に一段の工夫が望めないものだろうか。と言うのは、読んで研究の要点がつかめるプリントが意外に少ないからである。たゞ資料集又は図表代理にプリントを用いるに終らせないで、最少限のところ研究のすじ道がはつきりするような形式で書くようにしたいものだと思ふ。とくに、目的とか予想されることが始めに明確に示されているプリントは大変読み易いが、反対に、目的、方法、結果の論理的一貫性が明らかでないプリントは甚だ読みづらい。わたくしの言いたいことはこれだけだつたが、ついでにプリントを読んでいて感じたことを二三書かせていただく。

日本体育大学の長田氏の研究で、ESP得点がBBT、およびメンゼスとかなり顕著な関連があるという事実ですが、これは単に生

体の活動水準の変化と作業成績と言ひように一般化して考えてよいものか、それとも、ESPは何か特殊な感覚が作用するように受けとり、したがつて、ESP得点が高くなるということの方に、低くなるということよりも、より力点をおいてこの研究の意味をとつてよいものかどうか。勿論、事実以上の説明を求めるわけではないが、研究者はどんな仮説をもつておられるか知りたいように思つた。次ぎに、調枝氏のスキルの研究は、一部拝聴したが、そのときの記憶では、スキルを adaptability として見ること、およびそのための実験計画が念入りであつたことに印象づけられたが、プリントを読んでなお計画をはつきりつかめなかつたことが非常に残念であつた。いつかお伺ひしたいことの一つである。同様に、亀井氏の弓道の二項分布による得点分析も、研究の目的および仮説がもう少しはつきりわかつたら一層興味が湧くだろうと思う。私の興味は、熟練度の表示の一方法として、この研究から示唆を受けたのである。 どうなのかももう少し詳しく承りたい気がする。

以上、名前をあげて、このような不用意な感想をあえて述べてみたのには理由があります。それは「曲り角」を通して、もう少し赤裸々に、多少乱暴な批評的感想が伝えられるようになると思ひからです。そうすることによつて、問題意識を高める契機にもなろうし、発表者の言い足りなかつた奥底のものを引出すきっかけをつくることにもなるのではないかと思ひのです。失礼なことばかり述べましたが、これがプリントを読んでいて感じた私の感想でした。

体育心理学研究会総会

例年通り総会を学会大会体育心理学専門分科会シンポジウム終了後、日生会館において開きました。

最終日のため出席者は20名ほどでした。

会長挨拶のあと議事に入り、①41年度会計報告について、②「曲り角」について、③国際スポーツ心理学会について、④応用心理学会体育問題研究委員会について、⑤その他、を協議しました。

会計報告、「曲り角」については、事務局が積極的に今後活動することで、承認されました。

国際スポーツ心理学会については、現在早急に国内にスポーツ心理学会をつくるのが困難であるため、個人的に会員になることをすすめることになりました。明年メキシコオリンピック大会直後ワシントンで第2回大会がありますが、出席希望者などを集め、学会会議などに働きかけて補助金の獲得などを考えていきたいということです。

応心体育問題研究委員会については、経過報告があつたのち応心の会員でなくても、体育について心理学的研究をしている方に参加していただくこととし、体育心理学研究会会員は積極的に参加し、発表するようにしてはということでした。

(近藤)

☆☆☆☆☆☆

1968年10月第二回国際スポーツ心理学会がワシントンで開催される。国際スポー

ツ心理学会員になられようとする方、並に、第2回大会に出席されようとする方のために1965年4月、ローマで開かれた第一回の研究発表について鷹野健次氏の『抄録を通して見て』(体育の科学、1965年5月号)より紹介し、同学会の概要をつかんでいただくことにした。

。会はシンポジウム、自由発展、座談会の三つで構成され、その各々の内容は下記のようなものである。

○シンポジウムの各部門の発表内容

第一部門 スポーツ活動の精神生理学

生理学的心理、知覚、学習などに関する分野であり、トレーニングの心理的限界、スキルの習得、スポーツ場面における知覚、子供におけるボデー・イメージの正常な発達と感覚運動的経験との関係、セカンド、ウインド、フィットネス・テストの測定学的検討など。

第二部門 スポーツ的格闘の精神力学

情緒・意志、モチベーションなどに関する領域であり、スポーツにおける攻激的態度と罪の意識、試合成績におよぼすモチベーションの効果など。

第三部門 スポーツにおける精神病理学および心理療法

ドーピングの精神病理学、試合直前の異状興奮、スポーツにおける感情の表出とその根源、スポーツによる心理療法など。

第四部門 スポーツの心理・社会的な面

非行の防禦としてのスポーツ、現代社会におけるスポーツの意義、競技におけるチームの力学、チームスポーツのフォーメーション、ホッケーチームのグループダイナミクス、スポーツと精神衛生、スポーツの社会的奉仕

の可能性、スポーツに対する態度など。

第五部門

海軍、陸軍、空軍のスポーツの心理。

ここに柔道、合気道、空手が自己防衛スポーツとして論じられている他、登山者の心理なども含まれている。

第六部門

青少年の体育活動に対するモチベーション、青少年における人格特性とグループ内での地位および運動能力との関係、神経症の予防としてのスポーツ、知的作業およびスポーツにおける要求水準など、いわゆる教育心理学的な諸問題。

○自由発表

内容は非常に広範囲であるが、次のように大別できるだろう。

一、スポーツ活動のもつ衝動的、強制的な面のもたらす心理的諸影響 動的実験による比較研究も含まれる およびその他の種々の情緒的な面に関する研究

二、スキルの習得および神経筋肉的運動の特性を中心にするもの。

例えばメンタル・リハーサルの効果、スポーツマンの反応時間、試合中の精神集中度の測定、図形残効とスポーツ活動、スポーツの構成要素の研究のための因子分析法の適用、スポーツ活動におけるバックグナルの効果など。

三、スポーツの臨床的效果および社会心理学的意義などに関するもの、

スポーツの功罪について批判的な立場からの研究

四、特定の競技チームの心理調査を中心にしたもの。

○座談会

一、女子スポーツの心理学

内容は十分には判らないが、背後には女子に適当なスポーツは何か、あるいはスポーツの悪影響から女子を護り扱くことができるかと言った意識があるようにうかがわれる。

二、科学り一分肢としてのスポーツ心理学

以上であるが、アメリカなどの研究の進んだ国ほど研究が分化し、間接的になつておりその他の国では直接スポーツをとりあげているように思われる。

国際スポーツ心理 学会入会について

国際スポーツ心理学会では、国内にスポーツ心理学会があるときには、その会員がそのまま国際スポーツ心理学会の会員に登録されますが、現在、日本にスポーツ心理学会がありませんので、個人で入会していただくことになります。

会員希望の方は、会報と同封した申込書の必要事項記入の上、事務局にお送り下されば一括して本部へ送ることになります。

一括して送ります関係上、事務局への期限は、43年1月31日までとします。

編集から

日本体育学会第17回大会を終えて、心理部門の発表について振り返ってみました。学会に出席されなかつた方には、第1号、第2号をいつしよにお送りすることになりました。申し訳なく思っています。明年から、できるだけ多く刊行したいと考えておりますので、発表、御意見などをどしどしお寄せ下さることを期待します。尚、42年度会費が学会大会のとき、37名分納入されました。年度会費200円です。機会がありましたら納入していただきたいと思ひます。

(近藤)

体育心理学研究会会報

「曲り角」

昭和42年12月15日発行

代表 鈴木 清

編集 松田・岩男

近藤 充夫

連絡先 東京都渋谷区西原1丁目40番地
東京教育大学体育学部 体育心理学研究室
体育心理学研究会
電話(466)7111(代)(内)27